梅川

本間文庫
文庫 14
D 115

新
訂
訂

35

岡氏藏書

獲野作

文庫14
D115

岡本図書

目次

清春行相日わ泣残長破山敗
春く去づ泣破
狂思恩欺ひす照醉笛藝窮
（短詩）
（短詩）
話

むらさき

與謝野鐵幹著

清狂

○

われ男の子意氣の子名の子つるぎの子詩の子
戀の子あゝもだえの子

をのこわれ百世の後に消えば消にむ罵る子ら
よこころみじかき

○

夢は戀におもひは國に身は塵にさても二十と
せさびしさを云はず

○

情すぎて戀みなもろく才あまりて歌みな奇な
り我をあはれめ

○

親はありきむかし一人の親はありき百合の園

生にふとはぐれたり

○

よき音ろの鶯籠のせばきにもいきぞほろしき
我世となりぬ

○

そや理想こや運命の別れ路に白きすみれをあ
はれと泣く身

○

酒をあげて地に問ふ誰か悲歌の友ぞ二十萬年
この酒冷にぬ

○

紫の紅の萠黄のみづいろの絲はさまざま花は
眞白き

○

新しき冠たまはり人を載せて西七百里蘇州へ
わたる

○

みかはしてさしうつぶきてふくむ酒さても冷
えたりあれや別れの

○

わかれてはまたちる花にかごと云はずあわた
だしくも水を南へ

○

雲を見ず生駒葛城ただ青きこの日なにとか人
を咀はむ

○

蘭を手に麻のまごろも竹の笠わかきひじりを
紀の山に見る

○

詩に痩せて戀なきすくせさても似たり年はわ

れより四つしたの友　（泣菫君と話す）

○

たばしまに柳しづれて雨ほろし醉ひたる人と
京の山見る

○

手をたまへ梨の花ちる川づたひ夕の虹にまぎ
れていなむ

○

われにろひて紅梅さける京の山にあしたおり
つ神うつくしき

みだれ髪にかざしは青き松の若葉しろき裳裾
は水にひたりぬ

○

鎌倉はちさくはかなき夢の跡よまた賴朝の脊
を拊つな君（林外、碎雨、蝶郎諸君と鎌倉に遊びて）

○

竹に染めし人の繪の具はうすかりき嵯峨の入
日はさて寒かりき

○

野のゆふべ花つむわれに歌强ひてただ『紫』と御

名つげましぬ

○

白き羽の鶴のひとむら先づ過ぎぬ梅に夜ゆく
神のおはすよ

○

われまどふこれかりそめかわれまどふ終にわ
りなの忘れがたなの

○

われいまだ云ひとく道をおもふまでに世をか
へりみる弱き子ならず

○

世に立たん榮よ力よ君によりて今日わが得た
るうつくしき鞭

○

みなさけに涙こぼれぬさらば我師この子とこ
しへ醉へりとおぼせ

○

扶けのせて柳かざしてうつくしき手綱の御手
にろと口ふれぬ

○

老の眼に涙たたへてさはいへど戀は悔ゆなと
あなかたじけな

○

戀といふも未だつくさず人と我とわたらしく
しぬ日の本の歌

○

そのあした紅(あけ)の袖口裂きし子を人はねたまて
あはれと泣きぬ

○

世の常のそしりもつ子に今日なりぬ名にしの

神の袖うらみあり

○

母にそひてはじめて菫わが摘みし築土(ついち)ふりた
り岡崎の里

○

師の君の御袖によりて笑むは誰(た)ぞ興津(おきつ)の春の
雪うつくしき

○

うしろよりきぬきせまつる春の宵ろぞろや髪
の亂れて落ちぬ

○

五つとせをむつまじかりし友のわかれ城のひがしに春の雪踏む

○

見かはしてふたり伏目の人わかし梅にゆづれる車と車

○

友ひとり兄と仰ぐに君ひとり戀とたのむに我は幸の子

○

ろの花よ清きにもろきすくせありてふと夕ぐれの小雨にちりぬ

○

宮島の神のとびらに歌も染めず筑紫へゆくを人のなげきし

○

旅にねてすくせ相似しものがたり『親もあらぬ子誰によるべき』

○

遠き人をふたりしのびしおばしまのろの春の

山また夢に入る

○

春をわれしら梅の花に恨ありなどか風情の君に及ばぬ

○

あくがれぬそぞろになりぬ涙ぐみぬうたてなやむか酔ふか狂ふか

○

花は黄に草はみどりにふと見れば我はましろきつばさのなかに

○

われ十とせ操の山の名を云はずろこに別れし人の名を云はず

○

旭川にしら魚のぼる春のくれ酔ひたる人を車に載せぬ

○

笛吹くに吹くにいつしか百合多きこの國さては海いくつ越ねし

○

あらぬ名を我やおふせし君や着し云ひとく道
も昨日になりぬ

○

わがおもひ鸚鵡に秘めてうぐひすにそぞろさ
さやく連翹の雨

○

君が痩のわれにまされる春の朝とりて別るゝ
手と手の寒さ（くげぬまに綠雨君を訪ひて）

○

まどかなる光明負ひますまぼろしや牡丹ゆす

れて闇白うなりぬ

○

そとなでて鐘のおもひにたゆたひぬ裂けよと
撞くは人にゆづらむ

○

たどるべき明日もたぬ子に人ねたし紀伊の名
所を語りてすぎぬ（和歌山の桂舟と別る）

○

わが戀のみだれを人のもどけるに御袖ひろげ
て師はおほひましぬ

秀でたる御弟子のなかにわれひとり十とせ學
ばずあろもやぶれたり
わが歌のよわくなれるをほほゑみてとがめま
さぬもふかきみなさけ
身ひとつの浮世なげきてあなかしこ興津の二
夜師を泣かせまつる
あのこころせめて我師にそむかざれをのこと
こしへ世と戰はむ

○

めぐりあひて昔を說くに我れさびし人よ何と

て面がはりせぬ（大磯にて）

○

よしや君わが手とる子のありとせよ何をかご
とに袂はらはむ

○

うつくしき手毬に羽子の板ろへて春のもてく
るものと思ひし

○

いづこにてまたもとるべきさの御手ぞ柳ちる
なり加茂川の秋

○

二十九のあの朝なにをさとりたるわが門松のさてもさびしき

○

まづ讀むにあとしの書は何にらぶ十とせ人ゆゑ世ゆゑわびたり

遼州のとりでの雪の初日いかに友の中尉の二十五の春（以上三首かとしの元旦に）

年立つ日ろは誰なりし吉備の塾に項羽本紀を聲たかく讀みし

年立つ日城のひがしに鶴を見る竹の冠の人玉のごとき（以下二首京城の元旦かしのびて）

韓裝の年のはれぎぬまばゆかりき翡翠十八われ二十六

○

野のゆふべすみれひそかにささやきぬおなじねざしの友にとがあり（とみ子のもと）

○

いかにあの痩骨ひとつ世になくばさびしからずやあめつちの歌

○

われならで先づ知りし子のすたれずやあらぬ
反古にも道したはしき

○

たくつきにふさはむ色のましろきにさけよと
思ふ花すみれ草

○

しろき馬にしろがねの笛とれる神まぼろしな
るよ虹うすれゆく

○

山の岩の千重の巌窟ろのしたに誰ぞや我名を
喚ぶあゝほろき

○

いだかれて見たる御國の名は秘めむ星紅かり
き百合白かりき

○

かならずと戀をちぎるは興あさし花の紅きに
蝶はよりきぬ

○

春の花に榮ある戀は人知らむわれは秋草すく

せさびしき

○

わか水にかきぞめの筆なにありやかたあげ春はとらむ君なり

○

てまり繡ふ火かげに歌の筆たきてうたたねすがた兄うつくしき

○

娘つれてあとばに京のなごりあり御僧いづこへこの河わたる

○

われそぞろましろき衣の袖あはせ夕戸の梅に君が詩ずする

星かげにすみれの露よ百合の香よわがあけぼのの道うつくしき

○

いとし兄に乳は足らへりや春寒のながき年なりきぬまゐらする

○

あの世われ五千里の北星ひくき山の雪にもい

（以上二首蕭園君の詩集に題す）

きどほろしき

○

罵る子ひとり東に見いでたりさびしと云ふな
崑崙のこなた

ろの世にもわれに似し歌あらばあろ人よ始皇
を愚かと云ふな

○

子らつれて岡崎去ると日記にありわれよその
春七つの童

○

屠蘇すこしすぎぬと云ひてわがかけし羽織の
したの人うつくしき

○

世やつらき人やはもろき見ろなはせあの歌つ
ひに我のものなり

○

召すはいま歌の御筆か琴すこしかいやりたま
ふ八つ口のおぼれ

○

申すおとおはせど春に若狭よりと人の文きて

あの年くれぬ

○

されば君梅はつめたき花の名よ戀は名にあらずなさけと聞きし

○

おぼろげによわきなさけを知りそめて春の夕戸を戀ふる身となりぬ

○

かへるさの百二十里は寒かりき箱根の雪のうれのみか君

○

たはぶれと罵る人に悔あらむ今日のこころに戀をさだむな

○

四十九の今日よりさてはおそからじ夕の鐘はいくつ撞くもの

○

紫の黄雲(きぐも)にうつるしばらくは雲となづくな高き高き思

○

うらめしと云ふおとわれは心にず人なぐさむ
るおとのはか君
君によりてわれあたらしき智慧にたり弓にの
ぼせば琴の絃ならずち
かかるときかかる怨を負ふものか人の文みて
われ惑あり
おとさらに人を怨ずる戀はせじ夕の雲よ雪と
ならばなれ
あやまれりひとりゆくべきあめつちに人の子
の肩手をかけてみし（以上五首人のもとに）

○

世に堪へで毒仰ぎしと云はれんがをのこ面な
きおのごろのまどひ

○

京の子は舞のころもを我にきせぬ北山おろし
雪になる朝

○

君によりて初めて聞きぬ石狩に熊のむれ見し
木がらしの歌

○

芙蓉をばきのふ植うべき花とおもひ今日はあ
の世の花ならず思ふ
われひそかに榮ある花とたのみしも芙蓉はも
ろし水にくだけぬ
おもひでの多きを誇る秋ならずつめたかり白
芙蓉の花　（以上三首人とわかれて後）

○

有常が妻わかれせしくだりよみて涙せきあへ
ず伊勢物語

○

酒のまへに酒の歌なき君ならば戀するなかれ
市に入るなかれ

○

梅が香に人なつかしきあのごろとわれまづか
きぬ京へやる文

○

牡丹みるにときいろのきぬふさはじと白綾き
たる韓の妓翡翠

○

かざしにと若狹へさてはやるならずあせたる

色も京の山の花（人と殘れる菊も栗田山につみてさみ子のもと
におくるとて）

○

をさな髪ひとの洗ひしとおろとて水きよかり
き旭川の秋

○

しら梅の夕のしづく苦にしみてふとさめまさ
む夢ならばとも

せめてこれ御魂やすめんひとつなり親の御墓
に手をとりてこし（以上二首父君母君の御墓にて）

牛飼に問ひし十とせは親の上よ後の十とせは
今日一人ふにぬ（人と岡崎の酒居をすぎて）

○

あの花よただほほゑみて御手にのぼれ汝がむ
ちさきは君はやく知らむ

○

わりなくも寒きくりやの掛穿におちし鼠をう
らやむ思

○

秋かぜにふさはしき名をまるらせむ『そぞろ心

の亂れ髪の君』

○

われつひに夜寒の歌は成らざりき御心なくて
賜びし御題か

○

手を裂きて送るに北の酒うまし誰ぞや蒙古へ
明日入ると云ふ（難波葦涯に與ふ）

○

さらばわがうつくしき子のよわき子を掟とあ
らばとはに打ち給へ（裸体畫を掲げたる雑誌『明星』の頒布

を禁ぜられしさき）

○

あな寒むとたださりげなく云ひさして我を見
ざりし亂れ髪の君

○

歌なしと眉ひそむるはあやまれりおのうき秋
を戀せんと云へ

○

かかるときこのさびしさをなぐさめてともに
泣くべき世を知らぬかな

○

人ふたりましろきつばさ生ふと見し百合の園
生の夢なつかしき

○

しら梅の雪のしづくと君いふか皆くれなゐの
涙とれもふに（まさ子かかへし）

○

をとうとの雪のうさぎにまなこつくと南天と
りし岡崎の庭

○

雪のあさ宵のをとめの被衣乞ひて韓の都をま
ぎれ出でにけり

○

さはいへどそのむらさきの襟うらに鼻の知ら
ぬ秘め歌かかむ

○

蓮しろきちばしま近く師にはべりうすき月夜
を歌乞ひまつる

○

吉備の子のあたらしき歌ききにきて我頬ひた

しぬ旭川の水　（岡山にて諸友さよめる中に）

○

君に問ふを忘れてゐたり紫とくれなゐと何れ
戀にふさへる　（淺舟君に）

○

風ぐるまわれにもおくれをさなきにかへらば
しばし戀を忘れむ　（一色白浪君に）

○

秋かぜに胸いたむ子は一人ならず百二十里を
今おとづれむ

○

同宿（あひやど）に窪田通治の歌をめでて泣く人みたり涙
速江の秋

○

おもへ君霜をたばゆる秋かぜに蘇士（すえぜ）をこえて
更に西する

○

水よさは秋はものみなわりなきに竹をめぐり
ていづちいぬらむ

○

玉ひとつ戸にうしなひし夕より袷衣つめたく
髪みだれ初めぬ

○

もみぢ葉を誰の血潮といひさして古井の水を
うかがひし人

○

戀と名といづれおもきをまよひ初めぬわが年
ここに二十八の秋

○

われもまた鏡いだきて秋に泣くよおちし黒髪

封じこせな人（あき子のもとに）

○

人うらむ心といはじ何となくすみれ植ゑぬも
われのかたくな

○

なぐさめの歌はをしむな秋たけて別れし人は
痩のまさるに

○

戀するは詩をわづらふにことならず十とせく
だけて纔に成らむ

○

つひにこの二人が戀にふさはぬよなにか三十文字わが歌と云はむ

○

山の岩に野ずゑの水にさきなれて花つめたきは梅のさがなり

○

わかき子の秋に堪へずと小指かみてかきし血の文十とせ我手に

○

指さきて人へかへしの文かけるわが血夜目にも黑かりざりし（以上三首さる秋によめる）

○

玉椿たむけしぬしの名は云ふなかなしき柩うつくしき柩

○

うまれながら林檎このまぬ君と聞きて今得ん戀の末あやぶみぬ

○

人の子の名ある歌のみ墨ひかで集にせばやと

思ふ秋かな

○

いまだわれうれしと云ふに口なれずたゞあた
たかきなやみといはむ

○

わが歌を悪しと云ふ人世にあるにあしたうれ
しき夕さびしき

○

口づからながき別とおぼせとはつよきに似た
るよわきなさけよ

○

おとなしく春着ぬふ子を泣かせますな絲のみ
だれば秋の昨日なり

○

名をくだすろれを厭はば山の奥の石をいだき
て我戀と云へ

○

むらさきの襟に秘めずも思ひいでて君ほほゑ
まば死なんともよし

○

髪さげしむかしの君よ十とせへて相見るゑに
し淺しと思ふな（あき子と大坂にて相見し秋）

○

野鼠のものにおろるる戀ならば田にかくれて
も低く泣かまし

○

われにまづ毒味せよとは云ひ得たり許せさか
づき二つに割らむ

○

あめつちに一人の才とおもひしは淺かりける

よ君に逢はぬ時

○

あの雨を百二十里の西にてもひとり聽きつつ
ひとり泣くらむ

○

うつくしと御手なる絲の白き紅きながめてし
ばし結びまさぬ神

○

ひだり手に血に染むかうべ七つさげて酒のみ
をれば君召すと云ふ

○

竹を植ゑて翁と人によばれんもくちをし未だ
君が髪の黒き　（鐵南君に）

○

かくて猶きみがこころは岩木ぞとよそはむも
のか花を惜む歌

○

鶴折るになれし人やとわらはれて春のゆふべ
を殿ぬけ出でし

○

そぞろにも紅梅ちりて日はながし小屋なる牛
の鼻なでて見る

○

旅のあさ人の紅さす筆とりて醉ふ子とおしへ
春ぞとかきぬ

○

まづ起きて親のうがひの水くみぬ梅さく山の
霞しろき朝

○

尼君の山のおろものねずみ色にさてもたふと

ししら梅の花

○

あざかしやちさき一人に敎へられぬ伊勢ものがたり汝が身罪あり

○

うるはしと歌につたへし旭川きよき戀をも石に書く處（溪舟君のよろこびに）

○

三つのとし母のやは手にきえたると今宵といづれ夢うつしき

○

かへりみて國とは云はじ雪のあさ八とせ忘れし藁の靴はく

○

母の手にすねし昨日の癖とれぼせ着じな着かへじ花見のころも

○

錢しあらば玉のひつぎもあつらへん歌の反古もておほひぬるかな

汝がこのむ梅の花うゑ汝がこのむ春の水まく

うぐひすの塚

わすれても梅が香さむき夕月にあくれがれ出
づな世はねたみあり

まつりにはわがもたらせる酒もあり君が歌も
ありうぐひすの塚（以上四首鶯を蕭園君の庭に葬りし時）

○

わがなさけ歌には淺くなりぬべし桃のつぼみ
を封じてやらむ

○

髮一つみださぬ君にわが手もてかざさむ花も

あらぬ別れよ

わが戀を人に問はれてこころにもあらぬかな
たの星仰ぎ見し

○

くれなゐにろのくれなゐを問ふがごと愚かや
我の戀をとがむる

○

ふりかへりさては我筆ろとれきぬぬたる子れ
おす歌にあらじよ

○

山の巖になさけありきと云ふ歌よ幾とせたたば人拾ふべき

○

春寒の身にしむ夜やと裏の木戸ろとあけませる叔母君のなさけ

○

とてもわれ帛を裂かむに力なし糸のほつれの一つたぐらむ

○

牧の馬を夕しかる子こゑさびしさてもきのふ

は國罵れる

○

二十とせを黄金の鞍の驢は知らず牛にまたがるみやびをの君

○

かかるとき昔は我も泣きにけむ師は往けといふ親は在れといふ

○

ほのぼのと山の榛原かすむ日を鶯なきて小雨そぼふる

○

永き日をつみてすてたる花束に二つ舞ひよる
蝶うるはしき

○

涙もろきかかる男もありしぞとそしるなかば
に憶ひ出でよ君

○

愛したる馬にわかれて馬のために泣いて碑を
かく嗚呼君も老いぬ

○

石をだいて歌ふもをかし秋かぜやいまの世た
れか斯かる骨(ほね)ある

○

琴のあたりしら菊ひと枝いけて見ればわびし
くもあらずわが四疊半

○

わが涙わが手にうけて泣くだにも人とかく云
ふ世の常の戀

○

沖なかのいはほの上に君ひとり泣けり泣くよ

と見る見る覺めぬ

○

わが好きは妹が丸髷くぢら汁不動の呪文しら梅の花

○

山ふかき春の眞書のさびしさにたぐりても見るしら藤の花

○

誰やらに似ると思ひしそれのみに賣らてやみたる古ひいなかな

○

君を相す尋常詩家の派にあらずみづから棄つな負けじだましひ

○

羅漢寺の十六羅漢なき親におもざし似たる羅漢名は何

○

人ならば酒をも強ひん枕がたなさびし幾とせ善き仇もあらず

○

江に沿うて一里がほどの柳はら柳かざして牛にのるかな

○

池古りて浮草きよしひとり身の鷺鳥飼はまくここに庵せむ

○

繪扇に君がたましひ歌はあれど絲にのらねばただ諳によむ

○

住の江の御田の植女の花笠はあれども松の小

雨にぬれぬ

○

藻の花をわけてむすべば巖間より晝の月しろく浮きて流るる

○

ついばみて孔雀は殿にのぼりけり紅き牡丹の尺ばかりなる

○

をとめごのいかにしてまし賜りて立てば地にひくしら藤の花

○

痩せ痩せて手力はなし然かはあれど歌にひと
りの君を泣かせぬ

○

永き日を蓮の根かみて蓮の絲のつきぬがごと
も物思ふかな

○

それまことかふたり備後の福山に去年の暮よ
り花かざし賣る

○

稚兒髷ゆひて舞のかざしをあらそひぬしら藤
の花やまぶきの花

○

繞堂の稚兒のむれよりかへりこし五つの寫眞
人うつくしき

○

やまと歌にさきはひ賜へ西の空ひがしの空の
八百萬の神

○

人並にすまん願ひは斷ちしかどあないたいた

し妹が手の胼胝
紐紐さうぐひす籠に見初めけん人の玉手を米
かしがする

○

今日しもぞ御墓に歌をたてまつる古太刀解き
て松に掛くる思

○

なぐさめて我の憂ひに泣くべくば愛奴が子ら
も我が妻と云はん
御籤ひけば二十一吉とあらはれぬ神も知らじ

な我がおもふ人

○

犬蓼の花さく見ればしのばるゝ君と韓野に駒
なめし秋

○

花賣の小車涼しあさ靄に菖蒲ひと車載せて門
行く

○

もろともに往なんと云ふを心ならずれきて我
がこし韓の妓翡翠

○

事たがひ人おとろへぬ蚊遣火にほつれ毛うたて蕗の葉の雨

○

ひとり身のこの河下に釣垂れてたのしくもあらず春夏秋冬

○

年わかの追分上手この夏も載せて來よかし鰹釣る船

○

いもうとの初戀をかし戰爭終へて牛飼ひながら繪筆とる君

○

友ひとり棄てん惜しさに慚ぢよとて打ちし拳を人とかく云ふ

○

夕顔の下ゆく水に馬洗ひ足洗ひをればなくほととぎす

○

ここちよや蚊遣の末にみだれけり丈なる文に

君が名のある

○

石移し竹を移すとこの七日わが家の日記の清くもある哉

○

痛矢おひて泣ける小さの神を見き百合にねし夜のかひなのしたに

○

夢かこれさびしと云はず夢かこれ今日の二人の昨日の一人

○

ゑんじ色に人は袂を染めなれてまだしと云ひぬわが濃紫

○

春をうしと云ふことといかに君も知らむ花みな人のかざしになりぬ

○

似ずやこれ人にわかれし後のおもひ葉かげの花の一つさびしき

○

さらばわれことしの秋をちぎるべし玉の浦回の玉のごとき友（長崎の諸友に）

○

わがために筆あらふべく人のために髪あらふべく加茂の川流る

○

人ふたりそれいつの春酒を載せてらいんの河に長き歌成らむ

○

月をまちて渚（なぎさ）はなれし船ふたつ千鳥が淵に夏

の水みる

○

いまさらに誰の夢をかたどろかす鎌倉山のいりあひの鐘

○

夕潮にくろきもとどり洗はせて鬼界が島に夏の月みる

○

我ながら人の扇にのおしたる梅のひと歌なつかしきころ

○

あら鷲の一つ飛ぶかた見おくりてわが立つ巌に秋の潮よる

○

わがおもひつるぎにそはず詩にそはず夕ひそかに莫蓉を剪りぬ

○

おばしまに花を籠めたる朝の霧うへにほの見る黒谷の塔

○

人は輿われは驢馬よりおりたちて城のひがしに花踏みし朝

○

松かぜに人の名よぶは憚らずきのふは高師けふは須磨の浦　（三十三年の夏）

○

つひにわれまた慰めんすべ知らずさらばさびしき人の道ゆけ

○

驢にのれば驢はつかれたりかちゆけば足に血

ながる石山にして
雪にやどる荒山なかの狩小屋に変めしあまし
熊を菜に食ふ（この二首朝鮮旅行中の舊作）

○

山の岩に星まつるうた半なりて懐紙ふきまく
大あらしの風

○

松かせのさびしきかげに山鳩のきては霜ふむ
おくつき所

○

○

夕かぜに笛ひとふゑのあはれおめて酒賣る家
の柳みだるる

○

あはれ知る人にとはるる思してねざめうれし
き天つかりがね

○

もみぢ葉のおきひとねだを折りかざしてらし
てぞ見る山の井の水（さがの尾にて）

○

岩戸いでて青海原をみさくれば我も神代の神ごこちする（江の嶋にて）

○

ふみそめし文字の關守たのまれずこころづくしはよそにありと云ふ（卅一年の秋筑紫の人へ）

○

いくたびかかけては袖のぬれにけむおぼろの清水ひとわすれ水

○

人の國もとりてきぬべきてのひらに露おく朝

の花をつむかな

○

やり水の清きながれに浮べたるはちすの舟や載せていにけむ（人のをさなごのなげきに）

○

月の夜ををとめの船にさそはれて蓮の香ふかき池にねしかな

○

たとへなば牡丹は北のみかどにて菊はみなみの御末なるべし

○

ちりかかる牡丹のしたになりにけり君がとど
めし庭の玉靴

○

あやぎぬに玉をかざれる花輿はあれどもふた
り月に歩まむ

ときいろの長きからぎぬかきたれて城のひが
しに花を見るかな

春思

山の湯の氣薫じて
欄に椿おつる頻り
帳あげよ
いづおぞ鶯のこゑ

木の實の酒紫に
うくる手わななくか
さるは盃に口ふれて
醉ふ子の智慧問ふな

粧羞づる朝の星の
ろれか眼眸たゆげに
見てさし俯くに
涙そぞろなり

戀とや君
なさけ人間に墮ちむ
理想とや君
ことわり地を離る

われおもふ酒の旨きは
哲人もうべなはむ
許せもゆる手肱まきて
ただ沒我の二人

また何をかへりみむ
世の末に聖ありや
かの鞭をあげて罵る
みな栴陀羅の子等

如かずわれを知る子に
われを知る子の胸に
わが痩せし額まかせて
わが破格の歌誦せむ

君さては娘し
焼刃のこぼれ見て
むしろ剣の功績稱へ
驅零れし今日の我を責めず

祖國に入りて親なき子
掩ふとや
いざ倚らむ
おゝ温き紫の袖

われ受けざらむや
ろの慰籍の千言
疑はずあの地の上
今二人笑みて抱く

見よ瑠璃色の靄動きて
ほの白き花の香は何
これ君が謂ふ神秘か
虹うつくしく懸る

ふと見ればあな
眞白き翅君生ひたり
と思ふにわれも何時か
風に御して飛ぶ身

行く春

東里は柳
西里は桃

菜の花に麥つづき
麥にまた菜の花つづく
行く人も
立つ牛も
ともに霞みて
野はまづか雲雀啼く

見おろす畑の中道
東里を出づる人の列や
白き提灯先づ動きて

僧達の袈裟くれなゐに
輿なるは誰
從ふに衣みな白く
百の人頭垂れぬ

あれ新郎の耻羞き
さて美しきときめきの
御手に捲かれん幸の日か
彩のころもによそはれて
少女の笑みのさはいへど

母かへりみる花の興か
情あるかな出でて見るに
西里の人も打沈めり

野送りの列山に消にて
杉かすむ麓の寺
鐘なりぬ
また鐘なりぬ
さては今
おゝさびし『棄恩入無爲』

そぞろ我れ思ふ
才あるも才なきも
みめよきもみにくきも
蚕縁あるも蚕縁なきも
秀でしも拙きも
世を擧げて皆斯かるか
榮光はみじかく
喝采は稀れに

早く地に落つるもの
必ず黑き『死』の幕
はかなしや
人生の詩を結んで
寂として消ゆるもの
必ずこの鐘

誰か云ふ
『才あるは才に生く
容貌あるは容貌に生く

名は不朽
戀はとこしへ
紅き花の前に
大いなる樽を割れ
骨たかき大丈夫
死を說くは愚』と

げにさりや
げにさなりや
ホオマア死なず

ミルトン死なず
げにさりや
げにさなりや
胄たかき大丈夫
才あるに生きぬ

さはれたふけなや
これ我等が際か
かへりみれば
世の數ならず

名もなき子
才もなき子
行く春をここに
あゝ戀もなき子
運命つひに
思へばさびし
花なき草の獨枯れて
水にゆくと似ずや

いづれの地か

あらはれぬ玉やなき
なんの世か
無名の才の潛まざらむ
嘲罵の下に倒るるあり
自ら棄てて亡ぶるあり
あゝ才よ名よ戀よ
必ずしも不朽か

《人よ人よ
何がゆゑに來り

何がゆゑに去る》
碑は新しきも古きも
刻めるを改めず
終にこれ讀み難し
あゝ千古『疑惑』の銘

鐘やみぬ
人散じぬ
堂に花みだれて
長き春の日暮れぬ

悄として去りあへず
欄に倚るは誰
縁なき人の死に泣いて
はては我をも歎じたり

相思

梅といふな
百合といふな
譬喩つめたきに

ただ少女と云へ

このやは手
夕もゆるに
野の羊追はんは
人の鞭なり

さらば君
かぎりありや
はじめありや

戀は我れ想ふ
遂に夫れそぞろ

すくせ問はば
髪みだれたり
きぬ破れたり
人の子のまへ
榮ある二人か

巖かげの寒きに

またたく星見て
さは云へどしばし
あゝわりなし
世すてられず

名には盲兒
なさけには乞丐兒
もろきいのち
ながきそしり
それも悔いと

ひそかに誘る
くれなゐの袖かみて
また千とせ説かず
つよくつよき
おのふたりが戀

ほそ糸に
何の永久(とは)の音(ね)
春みじかく

琴は裂くるも
あゝ我歌よ激(はげ)しかれ

日本を去る歌

われ舊臘の一夜、心に激する所あり、南清に遊ばんとして、慨然として、ふの作あり。而も新詩社の事未俄かに拋つべからず、因つて遂に果さず。友人難波葦涯今一月を以て南清に遊び、更に僧服を着けて西藏に入らむとす。われ羨望の情に堪へず、篋底よりこの詩を出して補削を施し、以て葦涯に贈つて暘關三疊の餞に代ふと云ふ。

ああわが國日本
ああわが父祖の國日本
東太平洋の緑をのぞんで
白き被衣の女富士立てり
顧望して低徊す
山なんぞ麗しき
水なんぞ明媚なる
ああわれ去るに忍びんや
ああわが國日本

ああわが父祖の國日本
日蓮を生みし國
秀吉を生みし國
わが渦仰の古き友業平を生みし國
ここに十九世紀の末
誤つて詩人われ鐵幹を生みし國
ああわれ去るに忍びんや

父祖の國の自然はわれを優遇し慰籍す
父祖の國の歴史はわれを發憤敬慕せしむ

然れども父祖の國は汚れたり
われ遂に居るべからず

詩人の行動は天馬空を行く
不道徳や無頼や風俗壞亂や
悪語頻りに父祖の國に誤らる
ああ人間の繩を以てわれに強ふるか
迫害の時代に抗するは愚なり
われ遂に居るべからず

然れどもそは猶われ忍ばむ
更に父祖の子孫を見るとき
彼等が父祖の偉業と美德を忘れて
宗教を捨て任俠を捨て藝術を捨つるに至て
あわわが父祖の國は汚れたり
われ遂に居るべからず

いかに宗教を見よ
題目と念佛と纔かに老婆の死を安くす
内多事に外多難の世

法衣つけて誰か　正安國論を草す
峨々たる殿堂、京の大寺
緋衣の妖僧釋迦の屍賣つて
善男善女の血の酒
美女と金屋の春に戯る

名は美なり何を佛教清徒ぞ
滿身の毒を十年の小我見に包んで
輕薄や自由討究の語
師祖千年の苦行を顧みず

たま〳〵慇ろに諫むるの友を見て
却つて狂犬の罵りを爲す
彼等の手に依つて成ると云はば
新佛敎は罪惡なるかな
寧ろ虎溪の山に粥を啜つて
松の風聽くの淸きを想ふ
ああわが父祖の國は汚れたり
われ遂に居るべからず
われこの秋熱田の宮を拜して

泫然として涙たちき
想へ驗ありし父祖の劍
今列國の嗤ひを買ふの具に過ぎず
自から劍を執つて自から傷くるは
ああわが父祖神武天皇の道か
弱きを扶けて義のある所火をも踏むは
市井の無賴長兵衛も知りたり
二十七八年の役
何んが故に父祖の子孫を殺して

高麗半島の山河
空しく北夷の蹂躙に委したる

われ之を慨して閔泳駿を擁し
微力聊か本國を警めんとす
何事ぞ偵吏われを迫害して
治安妨害の名の下
三十一年の春、南大門の雪の夕
ああ遺恨なりや、われ女裝して
ひとり京城を去らざるを得ざりき

天津を落せしは誰ぞ
北京を落せしは誰ぞ
兵を用ゐる父祖秀吉を辱めず
しかもワ元帥は何んの國の人ぞ
ああ他人のために嫁衣を縫ふもの
われ二十世紀の日本に見たり

やまとだましひや武士道や
かくの如くんば何の價ぞ

ブウァの民の義氣あるや
能く英國の暴虐に抗して立ち
正義を叫んで二年を戰へり

われら南の方にあたつて
救ふべき亡國比利賓(ヒィリッピン)を見ざりしや
惜むべし纔に狡獪の小策士
義を口にして利を射るの醜を貽(のこ)す
あゝわが父祖の國は汚(けが)れたり
われ遂に居るべからず

ヴィナスの神
ミュウズの神
いざいざわれと共に去り給へ
この國の人みな盲目(まうもく)なり
とどまらば神に禍(わざはひ)おはさむ
神のやは肌を以て
盲人(めしひ)の杖に委するに堪へんや
神よあの國の詩人を賴(たの)み給ふ勿れ

彼等はすべて戯作者の子なり
狹斜を寫して文學となすに
藝術の高きを望むべきや
われ彼等の爲めに祝はん
柔和なる詩人
女子の如き詩人
幸なる哉わが父祖の國は
卿等に由つて平和なり

柔和なる詩人

女子の如き詩人
とる筆は其れ眉をはくの筆か
その詩なんぞ麗しきや
誰かまた一篇嬌激の詩を以て
漫りに宰相の嗔りを買ふものぞ
幸なるかなわが父祖の國は
卿等に由つて平和なり

顧望して低徊す
美なるかな祖國の山河

忘るるに忍びんや
去るに忍びんや
然れども迫害は急なり
われ遂に居るべからず
昨日女裝して京城を逃れし子
今男兒の歌を爲して去らむ

去る方はいづこぞ
南清の山雄かつ大なり
會心の友そこに有つて

この薄倖の詩人われを招く
黄河の水は濁りたりとも
わが祖國の汚れたるに如かんや

あわわが國日本
あわわが父祖の國日本
日蓮を生みし國
秀吉を生みし國
わが渴仰の古き友業平を生みし國
あわわれ遂に去らざるべからず

さらば、さらば、さらば

わづらひ

○

わが歌は芙蓉のしろき梅の清き戀はすみれの紫をこそ

○

わが手とるは黒き被衣の死の御神たのみし星もちいさくなりぬ

○

くちをしく殿の牡丹は葉になりぬ君例ならずおはしけるほど

○

おく山の牡丹のふる根巖を掩ひしろき花さく我世ここにへむ

○

霜さそふあらしのすゑに山畑の豆がら鳴りてあの日も暮れぬ

○

心にもあらでわかれしますらをの戀しくもあるか春の鳥なく

○

二人してうゑし桐の木たけのびぬ桐は琴となる戀は歌となる

○

そのむかし泣くなと我をいさめけむ泣かでや君は墓のしたなり

しろきはすの水を出づること五六尺たれぞや月に笛を吹きてくる　（以上三首慧眼上人の忌に）

○

松かげにみやこの人の名をかけばさざ波よせてやがて消ゆにけり

おもざしは都のひとに似たれども三味ひく子なり磯の船にして　（以上二首卅一年の夏濱寺にて）

○

おぼ鐘のしづめる海に雲あれて龍のなみだの雨こぼれきぬ

○

われ忘れずうすき月夜を池にそひて二人めぐ

りしひとゝもと丁子

○

梅の花まどの硯にちらうきぬ人なつかしき歌かきをれば

○

わが歌の古反ぞと知りて裂きもやらぬなさけある人それをのこならず

○

紀伊に入らば岩裂きくだす那智の瀧に目を閉ぢながら世をおもひ來よ

○

われならばその片頰をも打つべきに泣きてやみたる人のやさしき

○

いかづちのしたにおくともおどろかぬ我も君には碎けつるかな

○

夕潮に磯の松が根あともなしいづこぞ君とふたり立ちたる

○

風をり〳〵磯のかすみにさはるらむ松の葉ち
れりあづまやの上に

○

高野(たかの)やま石楠(しやくなぎ)かをるありあけにしだり尾しろ
き鳥のひと聲

○

ふところにハイ子の詩あり泣きながら百尺の
巖に海の月みる

○

萩の筆はながき恨をうつすべし誰におくらむ

白芙蓉の花（百花園にて）

○

まことそれすみれは天(あめ)のにほひなり教へて人
の髪にのぼさむ

○

花のまへに人はみすみす老ゆるものこの春の
日もまた夕なり

○

人のいふ牡丹はつひに地の花とそれおもしろ
し諸手(もろで)にだかむ

○

戀の子はいさめのまへに耳しひぬひろひ給ふ
な人まもる神

○

みだれしは缺けしはやがていさをなりつるぎ
に似たる我を咎むな

○

猶も人戀をののしる歌ありや玉手はきよき乳
はあたたかき

○

比良おにて雲もかなたへ行く夕こころにかか
る若狹路の雪（西京よりさみ子のもとへ）

○

やらじとはかの人の子もわれに云ひぬつよく
別れて別れて笑まむ

○

云はぬをばつよしと云ふはわれ知らず泣けな
狂へと人のをしへし

○

かの雲の黒きに入らむ我ながらさてかへりみ

て人なつかしき

○

問ふを許せわれもそぞろの春の夜をわびねの夢や寒きあたたかき

○

今すぎし小靴(くつ)のおとも何となく身にしむ夜なり梅が香ぞする

○

とはのいのちとはの戀路はそこにあり目をとぢながら道いそぎ給へ

○

世のすゑにかかる戀あり歌もありつよき三人(みたり)を東に生みぬ

○

手をあげて魔を打たんには我れのあり人よ袂のかげにほほゑめ

泣菫と話す

涙華(なにはい)の市

好會こゝに兩度
若き詩人と對す
趣味知る少女の戀か

斟む酒琥珀色に
子が手何んぞ白き
笛のにがきを說くな
唇莫蓉の紅流る

世の詩風を笑へ

百の弓よわからずや
野は荒れたり
子がまへ鹿落つ

あゝ措大われ
痩せて髮長き
五百里の霜
きのふ西けふ東

長ずる年四つ

名は悲し
戀脆し
行くに何の榮ありや

寂寞の石
子が接吻無くば
堪へんや嗚呼堪へんや
秋の日沈む

天王寺

梅が辻
追懷の明日を訪へ
杖の香いづらぞ
菊寒く鐘ほそき

殘照

そぞろなりや
そぞろなりや
夕髪みだる

地に霜あり
常住も何んの夢ぞ
人堪へんや
花堪へんや

嗚呼わりなし
水さびしげに竹をめぐり
痛手負ふ子に似て
獨り秋を去なんとす

山藜の莖あらはに
黄ばむ日戸に弱し
入しのばざらんや
西の京の山

破笛

孔一つ
節せばし

手づから竹を斫つて
都門の霜に吹く

世短きに
ゲエテエ出てんや
バイロン出でんや
若き子の前
長き歌問ふ愚なり

花とび蝶ゆくも

意氣は世の香ぞ
うらぶれて笑むば
あゝ人かわゆし
亂れし髪をあぐるに
手の痩せを思はんや

かへりみれは
わが影後に
眼を閉づれば
慰籍前に

才はとこしへ
咄、寒きを云ふな

わが名咀ふ
何んの咎ぞ
わが戀しのぶ
何んの嫌ひ
歌口血に染む
短きも他人の笛か
無聊に堪へず

いざ宰相の駕横ぎらむ

長醉

わりなくも
まどふにまどへ
花の散るに
春寒からずや
人の泣く
我れとどめわへず

戀はそれ
顧みるに榮(は)に
名はろれ
仰ぐに燃ゆ
追懷(おもひで)なくば
戀今(にが)苦し
希望(のぞみ)なくば
名は昨日(きのふ)に朽ちぬ

世に醉ふもの
世に活きざらんや
君何を疑はん
ここに二人戀ふ

つよくつよく
泣くに王者(わうしや)も憚らず
襟は冷(つめた)きも
色紫なり
病む子を責むな

痩せて酒嘲る

山蔭

理想の御親力なきに
若き同胞倦んじぬ
夕二妹の弱手とりて
西の山に宿る

笑みて欄に倚るも

姉の髪みだれたり
雲も憂し
水も憂し
いづれは行く秋
涙伏せずや

ちひさき人よ
御手ゆるせ
悶に
狂ひに

一夜泣かむ

げに夢ぞ
げに幻ぞ
高かりし
清かりし
美しかりし
朧かりし

あゝ今知る

人の子を憎んで
何んの罪ぞ
鞭加ふる者
魔にあらずして人なり

芙蓉なまじひ崩ゆる知らず
地に天の香懸ひずは
霜に堪へて
秋恨みじを
のがれんや

嗚呼わりなし
秀でしもの
世は皆もろき

何んの才ぞ
冷き形骸抱いて
夕ほこりかに
酒の香を吹く
生命なし
戀あらんや

歌あらんや

さらば君
ちひさき人
うつくしき人
飽かなくに
朝別れん
白き芙蓉の心のみは
兄と姉の手の上
とこしへ放たじ

とこしへ忘るな

小霧に山踏みて
別れにひく山蓼
莖くれなるに
嗚呼何んの恨ぞ
想へ理想の袖寒く
われら毒を仰ぐ夕
生血この色流れむ

敗荷

夕不忍の池ゆく
涙おちざらむや
蓮折れて月うすき

長酡亭酒寒し
似ず住の江のあづまや
夢とこしへ甘きに

とこしへと云ふか
わづかひと秋
花もろかりし
人もろかりし

おばしまに倚りて
君伏目(ふしめ)がちに
嗚呼何とか云ひし
蓮(はす)に書ける歌

明治卅四年三月三十日印刷
明治卅四年四月三日發行

定價金參拾五錢

東京市麹町區上六番町四十五番地
發行兼著作者　與謝野寛

東京市麹町區飯田町四丁目卅一番地
印刷者　大野喜六

東京市麹町區上六番町四十五番地
發行所　東京新詩社

主筆　與謝野鐵幹

文學美術の兩方面より東西の新趣味を供給して現代國民の藝術眼を一新せんとするは『明星』發行の微旨なり

發行所　東京新詩社

毎月一回文學美術專門雜誌

30 ヌ/9/5